
養老の滝

FLASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

養老の滝

【ZPDF】

Z2180E

【作者名】

FLASH

【あらすじ】

「ああっ女神さまっ」の一次創作小説です。蠻一とベルダンディーメイン。ウルドがちょっとと自動車部のメンバー少々（笑）スクラドルファンの方、ごめんなさい（汗）ある意味良く見られる風景なのですが……。の中にも日本酒が嫌い、といわれる方はいらっしゃるのでは？

酒は呑むべし、飲まるべからず。

これは、過去数多くの呑み助たちが理解していると豪語し、同時にまったく理解していなかつたことをさらけ出すこととなる言葉である。

げに、酒というものは実に難しいのだが、そのかぐわしき風味に誘蛾灯のようにひかれ、はまり込んでいく者は後を断たない。ま、中には無理矢理引っ張り込まれた奴もいるんだけど……。

* * *

「一番ッ、大滝！『おんなじころ』唄いますッ！」

素つ頓狂な声での宣言とともに、どこか調子の外れた歌が室内に響きわたる。周囲の人間はそれをとがめるどころか、やんやの喝采とともに手拍子を始める始末であった。

人いきれと料理の匂い、そして何よりも熟柿というにはいささかひねた香りが満ち、テーブルの上の料理と酒が何回も目まぐるしく入れ替わる中、「自動車部大宴会 in 森里屋敷」はその絶頂を迎へようとしていた。

「やれやれ、やつぱりこつなつちゃつたかあ

客間と居間をぶち抜いた宴会会場の一角に座り込みながら、蟹一は苦笑とも諦めともつかない表情を浮かべていた。先ほどから手にしたグラスの中身をなめるように飲んではいるが、中身はほとんど減つていない。

と、いきなり襟首に手がかかったかと思うと、あつと言つ間に蟹一は田宮の隣へと引き寄せられた。聞くまでもなく、彼の周辺からも熟柿の匂いがふんふんと立ちのぼつている。

「こらあ、もおりいさとおう！ 貴様、全然飲んでいないではない

かつ！」

「あ、いや、それほどでは……」

螢一も一応無駄な弁解を試みるのだが、血色の良い顔をてりてらと光らせ、目が据わりきっている田畠に、もとより通じるはずもない。

「弁解無用っ！ わあ、ぐつと空ける！」

更に酒を注ぎ足され、溢れんばかりになつたコップを見て、螢一はため息をひとつつくりと、コップの中身を一気にあおつた。

強いアルコール臭と妙に甘つたるい後味に、螢一は思わず眉をしかめるが、田畠はようやく満悦といったところだ。

「よおしつ、それでこそ男だ！」

田畠がうなずいているのに適当に返事を返すと、螢一は再びなみなみと注がれたコップを手に、元の席へと座り込んだ。手近にあつたつまみを一口三口とつまむと、ビリビリが口中の不快感は遠くへ去つていった。

別に、騒ぐのが嫌いって訳じやないんだけど、これはなあ……。

螢一は手元の酒を見て、大きく息をついた。

螢一は、別に下戸というわけではない。むろん酒豪といつぱりでもないが、入学と同時に洗礼を受けて以来、酒とはそこそこつまご付き合いをしてこるつもりであった。

が、その彼にして、この酒ばかりはビリにも相性が悪いようであつた。

* * *

そもそも、なぜ彼がその酒を飲むはめになつたかについては、多少の説明が必要である。一言で言えば、すべては自動車部の宴会会場が森里屋敷に決まつたことに端を発している。

これには螢一を始め屋敷の居住者、ことにウルドとスクルドの猛

烈な抗議があつたのだが、自動車部は 正確には主に田宮と大滝が 主張を引つ込めようとはしなかつたために、必然的に話し合いは紛糾した。

「このまま続くかと思われた両者の膠着状態が一挙に終了したのは、ベルダンディーの一言であつた。

「みんな集まつてのお食事つて、とても楽しそうですね」

いや、ちょっと違うんですが。

それはともかく、まさに天の裁定ともいうべき彼女の言葉には誰もが、そう、女神たちですら逆らうことができず、ここに問題はめでたく解決をみた。

まあ、問題といえば、彼女もその原因と言えなくはない。

なにしろ、ベルダンディーの作る料理の味は、彼らの間ですでに伝説的な色彩さえ帯びて語られており、それを田端にて押しかけられることがなど過去に枚挙の暇がない。要するに今回もその一端といふことであつた。

螢一をはじめとして文句を言つていた面々も、ベルダンディー自身が楽しそうなのだからそれはいいとして、今回はちょっとした問題が残つた。

酒が、なかつた。

自動車部宴会¹用達の酒といえば、「天狗ノ舞」と相場が決まつていたのだが、いよいよ宴会が始まろうというその段階になつて、誰も酒を調達していないことにいまさらながらに気がついたのだ。

宴会のメイン・ウエポンがなければ盛り上がりに欠けること著しく、なにより首謀者ふたりが承知しない。メンバーが慌てて持ち寄つたのが今問題になつている日本酒であつた。

一見すれば何の問題もなさそな茶色の瓶に収められたこの酒、実は三増酒（三倍増醸酒）と呼ばれる安物である。

慌てた一行のなけなしの手持ちでどうにか手に入れられるくらいに安価なのはいいのだが、なにしろもとは戦時中の米不足を補うために、ともかく量をふやすことを主眼に開発された酒である。見た

皿はともかく、さまざまな添加物によって作り上げられた「アルコール飲料」と言つた方がいい。

「」のさまざまな添加物がもたらす人工的な甘みと後味が、いわゆる「日本酒嫌い」を生み出す原因のひとつであり、同時に蟹一に顔をしかめさせていた理由であった。

こんな酒がいまだ生き残つてゐるというのも驚きではあるが、安価なだけにいまだ販売需要は大きいらしく、酒屋なら間違いなくどこでも手に入る。

最初は見慣れぬ銘柄に顔をしかめた田富たちであったが、そこはそれ、酒がなければメチルでも飲むと言い切つた彼らのこと、それほど経たぬうちに、たちまちに瓶の中身が減つていくこととなつた。
「」用達はどうした、と言いたい気がしないでもないが、誰もが醉眼朦朧まつしぐらという状況の中、ひとり蟹一だけはどうにもこの酒になじめず、心地よさとはまるかに縁遠い境地のまま、徐々に重くなつていいく頭と戦つていた。

どうやら彼は、この屋敷で消費される酒の傾向にすっかりとなじんでいたようである。

ちなみにその酒の持ち主に供出を打診したところ、引きつった笑顔と仁王立ちのコンボで「丁重に」辞退されたとか。

「はいっ、お待たせしましたっ」

朗らかな声と同時に、宴席に歓声が上がつた。台所から姿を見せたベルダンディーの両手には、つまそつな料理の皿があたたかな湯気をたてていた。

メンバーは我先にと皿を受け取ると、争つようになに皿の中身を取り分けていく。いかほども経たぬうちに、皿はきれいに空になつていた。

「あらあら……。あの、お代わりはいりますか？」

あちこちから一斉に手が上がったことを確認すると、ベルダンディーは小さくうなずき、きびすを返した。料理は彼女にどつても楽しいことであつたし、それを喜んで食べて貰えるところのあれば、まさに本懐と言つてもよかつたからだ。

お酒も、もう少し足したほうがいいかしら……あら。

何気なくテーブルの状況を確かめていたベルダンディーの眉がわずかにひそめられた。視界の隅に入った光景が、彼女の心にアラームを鳴らしたのだった。

ベルダンディーは「ぐく自然に進路を変更すると、そつと声をかけた。

「螢一さん？ どうかなさいましたか？」

なにか考え事をしていたのか、螢一ははつとした表情を浮かべると、今初めて気がついたかのように振り向いた。

「あ、いや、別になんでもないよ」

「あの、もしかしてお料理が口に合いませんでしたか……？」

不安そうな声に、螢一は言葉と身振りの両方でそれを否定した。

「いや、違う違う！ 料理はとてもおいしいんだけど、ちょっと酔つちゃったのかもね」

「そうですか？ ……あまり、『無理はなさらないでくださいね？』

「うん、ありがとう」

ともかくも何か異常事態ではないと分かり、ベルダンディーは安堵の表情を浮かべると、周囲の要望に応えるべく、台所へと姿を消した。

ただ、その瞬間まで彼女の視線が螢一から離れることもまたなかつた。

鍋の中で、煮物が小気味のよい音を立てている。傍らではもう少し炒め物が仕上がるところであつた。

＊＊＊

ベルダンディーはそれぞれからほんの少しずつ中身をつまみ上げ、口に入れる。己の成果に、彼女は小さくうなずいた。

それを器に盛り付け、こぞ宴席に持ち出そうとしたちょうどその時、ふらりと台所にウルドが入り込んできた。

「あら、姉さん。どうしたの？」

「んー、ちょっと様子見にね」

ウルドの足取りは、どことなくぼわぼわとしたものだった。頬もうつすらと紅に染まつており、宴席と似た、だがもう少し柔らかな熟柿の匂いが彼女を包んでいる。

「あいつかわらず賑やかねー。だいぶ酔いも回ってるみたいだけど」「姉さんも、よければこっちに来ればよかつたのに」

「」のよつな宴席には珍しく、ウルドは自室にこもつたまま姿を見せようとしなかつた。ちなみにスクルドは先ほどまで果敢に挑戦していたようであるが、今は見事に沈没している。

それはさておき、ベルダンディーの言葉に、ウルドは小さく背筋を振るわせた。

「あ、ごめん。今回はやめとくわ。……まったく連中も、よくあんなお酒を飲めるわねー。」れなら、ひとりで飲んでるほうがましつてものよ」

……拠出拒否された酒の使い道、みつけ。

「あんなお酒、って……。姉さん、これって何かいけないの？」

ベルダンディーは思わず足を止め、宴席に運ぼうとしていた一升瓶を指し示した。

「いけないっていうか、少なくとも私は飲みたいとは思わないわね。こくも香りもいまいちだし、なんか無理やり味を整えているあたりがどうもねー」

「そうなの……？」

飲兵衛……もとい、酒をこよなく愛するウルドの言葉には、それなりの重みがあった。ベルダンディーの脳裏には、先ほど螢一の顔が浮かんでいる。

彼女はしばし足を止め、なにやら考え込むそぶりを見せた。

「ベルダンディー、どうしたの？」

「……姉さん、悪いけどこれ、そつこに持つていいってもらえないか

しら？」

「え？ まあ、それくらいは構わないけれど……」

いきなり皿を手渡され面食らったウルドを尻目に、ベルダンディーは台所の片隅にしゃがみこむと、指先で複雑な文様を宙に描き始めた。

彼女の目の前には、自動車部の面々が買い集めた例の酒が数本、何かを待ち受けるように置かれていた。

(つづく)

「つむ、つま～！」

普段ならどうかすると質より量、といつ食事になりがちの田宮であつたが、ウルドが運び込んだ野菜炒めをひと箸口に運んだ途端、思わず感嘆の声を漏らした。

しゃきしゃきとした歯ごたえと、絶妙の塩加減。見た田こそ質素であつても、これほどの味はレストランでもそうそうは出せないのである。酔つてはいてもそう思わせるだけの力がこの料理にはあった。

それは、周囲がものも言わずに野菜炒めを取り合つてゐるといつからも明らかである。

「いや、やはつこれはなかなか……。といひでウルドさん、ベルダンティーは？」

「なんか、台所でやつてたけど……」「本当に、何をしてるのかしらね？」

「お待たせしました」

と、噂をすればなんとやら、台所からベルダンティーが1升瓶を2本手に姿を現した。

……冷静に考えるとすゞい光景であるが、そんな姿でも魅力あるよつに思えてしまうのは、彼女ゆえであろうか。

「姉さん、ありがとうございます。こつちはこのあたりで分けてくださいね」新たな歓声が起ころるなか、ベルダンティーはもう一本を手に、螢一の傍らに片膝をついた。

「えつ？　えつと、これつて……」

「はい、螢一さん。よろしかつたらおひとついかがですか？」

にっこりと微笑みながら明らかに注ぐ体勢をとるベルダンティーに、螢一は困惑したような表情を浮かべた。

確かに彼の田の前にはトップがあり、中身は空になつてゐる。注

がれる条件としてはこれ以上ないほどに揃っているのだが、中身をすっかり空け、周りに気づかれぬように隠し通すのにいかほどの努力が必要であったか、螢一は思わず説明したくなってしまったほどであった。

「あ、その、ベルダンディー？ 僕、酒はもひ、ちょっと……」

それは心の底からの、嘘偽りない本音であったのだが、途中まで言いかけたところで、螢一の舌は鉛にでも変じたように動かなくなってしまった。

そりやまあ、田の前でベルダンディーがかすかに田を潤させて自分を見つめていたりすれば、たいていの者はそうなってしまうであろう。

「あ、その……」

「ダメですか？」

そこはかとなく哀しげな声が、螢一の耳朵をしたたかに打ち据えた。

「い、いや、とんでもないっ！ いやー、ちゅうづ呑みたいところだつたんだ。嬉しいなー」

大根役者、まっしぐら。

だが、目の前でベルダンディーが嬉しそうに顔を輝かせているのだ。この状況で引き受けないという選択肢は彼の中には存在しない。心中でだけため息をつきつつ、螢一はグラスを取り上げた。

とくとくと小気味よい音と共に、山吹色の液体がグラスに注がれていく。

ああ、ベルダンディー。そんなに入れなくともいいんだけど

……。

螢一の心の叫びは、どうやら届かなかつたようである。

7分田を超えて注がれた酒を、螢一は恨めしそうに眺めていたが、注ぎ終えるとベルダンディーは何を思ったか、そつと口を螢一の耳元に近づけた。

「…？」

不意の接近に、螢一の心臓が軽くステップを踊る。これほどに熱気に満ちた中であっても、ベルダンディーの優しい香りははつきりと彼の鼻腔を刺激していた。

そちらに注意がそれた一瞬、ベルダンディーのささやく声が流れ込んできた。

「螢一さん、ご心配かもしれませんけど、私を信じて呑んでみてください」

「……ベルダンディー？」

それは一瞬のことであったので、周りからはベルダンディーが一瞬よろけたくらいにしか見えなかつた。それほどにわずかな時間であつたが、彼女の声は、はつきりと螢一に聞こえていた。

まだことなく要領を得ないままにぼんやりとグラスを捧げていた螢一であったが、わずかに表情を和ませると、ベルダンディーに向けて小さくうなずいて見せる。ベルダンディーもわずかに微笑みを浮かべると、てきぱきと他の者のグラスへと残りを注いでいった。見れば向こうでは、いつの間にかウルドがもう一本の中身を注ぎまわっていた。たちまちのうちに、全員のグラスに酒がいきわたる。と、ウルドがすつと立ち上がつたかと思うと、いつの間にか手にしたグラスを高々と掲げるではないか。つられるように次々とメンバーが立ち上がり、グラスを持ち上げた。

「それではーつ、ご唱和願いまーす。かんぱーいっ！」

『か、かんぱーいっ！』

なにがなんやら分からぬまでも、一同は勢いのままにグラスに口をつけていく。

ええいっ、こいつはたらー！

螢一は一瞬だけコップを見つめると、意を決したのか目を閉じて口をつけたが、最初の1滴が舌に触れたか触れないかという瞬間、彼は目を見開き、動きを止めた。見れば、ウルドとベルダンディー以外の全員が同じポーズのまま微動だにしないではないか。

不思議な静寂が、会場に訪れた。

瞬転、喉のなる音が一斉に響いたかと思つと、一同はそのままぐつと「コップの底を天に向けた。やがて彼らはなんともいえぬ息をつくと、一斉にベルダンディーのほつを振り返つた。

「お、おわりっ！」「俺もっ！…！」

「はい、ちょっと待つてくださいね。すぐ持つてきますから」なんともすゞしい騒ぎの中、螢一は自分までもがコップを空にしていることに気がつき、呆然とした。

「い、一体何が起つたんだ？」

先ほど注がれた酒は、確かにラベルはさつきまで飲んでいたのと同じはずだったのに、全身のすべての細胞は、まったく違つと歓喜の絶叫を上げていた。

だが、なぜと疑問が具体化する前に新たな酒が登場すると、螢一は物も言わずにグラスを差し出していた。

* * *

「あーあ、だらしないわねえ。ま、当然つていえばそつなんだけど……」

辺りを見回しながら、ウルグは苦笑とも呆れともつかない表情を浮かべていた。

あれからどれほどの時が過ぎたのであらうか、料理の皿は見事に平らげられ、会場には自動車部の面々が見事にひっくりこけ、高いびきを上げていた。

螢一もまた、部屋の一角で静かに寝息をたてている。顔は酔いのせいか赤らんでいたが、その表情はどことなく満足げであった。

「結局、つぶれちゃったわね」

「ええ……。でも螢一さん、楽しそうでしたし……」

「まあ、ね」

そりや、1級神が手すからお墨付きのお酒となればね、おこしやもなるでしょうよ。

ウルドとしては苦笑するしかないが、同時に納得もしていた。

ベルダンディーに瓶を渡され、そんざいに蓋を開けたその時、流れ出してきた芳香がウルドの感覚に引っかかった。

さすがは酒飲み女神……いやその、酒をたしなむだけのことはあるというべきか、ためしにと蟹一たちと一緒に呑んでみれば、これがもう大当たり。口に含んだとたんにふわりと広がる柔らかかつふくよかな香りと、米以外にはなしえない豊かな風味、そしてのどにしの良さは、これが同じ酒かと思わず見直したほどであった。

なるほど、法術を使つたわね。

ピュリフィケーション。

本来は汚染されたものを浄化するための法術なのだが、ベルダンディーはそれをアレンジして呑え、ものは同じままに、最も本来の実力を發揮できるように調整をおこなつたのだ。おかげでこの酒は最高級とは言いがたいものの、かなりのレベルを發揮し、結果は今見たとおり、というわけであつた。

「それにしても、あんたもよべこんなこと思いついたわねー」

「せっかく飲むのでしたら、蟹さんのお役に立つたほうがお酒さんも嬉しいと思つて……それ」

「それに?」

「蟹一さんが、ちょっとおつらひうでしたし。でも、かえつて悪いことをしてしまつたかも……」

ウルドが見たところでは、酔つている以外は特に問題はなさそうだったが、それでもベルダンディーは、蟹一の傍らに座り込んで、心配そうな表情を浮かべていた。

ウルドは何事か言いたげに口を開きかけたが、軽く肩をすくめるやれやれといつもくつこに息をついた。

「まあ、こくらくなつたとはいっても、1升近くも飲めばそりやつぶれるわよね。でも幸せそうな顔しちゃつて……。蟹一、この果

報者つ

あんたも、そんなに強くないっての?」

以前、共に酒を飲んだこともあるから、彼の強さは大体分かる。それを越えてもなお飲んだといふのは、つまりは螢一自身の謝意であろうとウルドは理解していた。

「えつ？ 姉さん、何か言った？」

「なんでもない。」ひつひつは見ててあげるから、早く寝かしつけてきちゃいなさい

「ええ、それじゃ……」

ベルダンディーは口の中で小さく詠唱すると、螢一の身体をそいつ持ち上げた。後に残された酔っ払いどもに珍しくも毛布などかけてやりつつ、ウルドはふたりが消えたほうを振り向いた。

「……なんだつたら、ふたり揃つて寝ちゃつてもいいのよ？ お疲れさん」

もちろんこの時期期待がなかつたと言えば嘘になるが、ウルドとしては純粹に冗談のつもりであった。

だから後に、その言葉が本当にうつむけ夢にも思つていなかつた。

遠くから、スズメの鳴き声が聞こえてくる。柔らかな朝日が部屋に差し込み、螢一の顔を照らし出した。

「ん……」

眩しさにわずかに顔をしかめ、それからすりすりと目を開く。屋敷の中は静けさに包まれているようだった。

「あ、あれ……。ここは？」

少ししてから、螢一はよそいが白室であることに気がついた。服装は昨夜のままだったが、きちんと布団に寝てこむみつだ。

「えつと、俺、いつの間に寝たんだつけ？ 宴会は？」

少なくとも、喧嘩の中で意識が朦朧としていたことは覚えているが、その後はさっぱり覚えていない。螢一は頭に手をやつてみた。

少し重くはあるようだつたが、痛くはない。

上半身を起こさうとした螢一は、右手が何か柔らかいものに触れたことに気がつき、何げなくそちらに手を向け、心臓が一拍打ち損なうのが分かつた。

彼の傍らには、ベルダンディーが寄り添うようにして横たわっているではないか。どこに手が触れているかをようやく理解した螢一は、慌ててその手を引っ込めた。

「わ、わわわ……。な、なにがどうなつてるんだつ？」

「ん……。あらっ？」

騒ぎのせいか、ベルダンディーは一瞬身じろぎすると、ぱちりと田を開いた。螢一とベルダンディー、ふたりの視線が交錯する。

「螢一さん……？」

「あ、あの、その、これは……」

「おはよう」やこまくつ

元気なお返事である。

「……へ？」

惚けたような表情を浮かべる螢一に、ベルダンディーは申し訳なさそうに身を縮めた。

「『めんなさい。螢一さん』を『』までお連れした後、私もつい寝てしまつたみたいで……」

「君が……？　あ、もしかして、やつぱり昨日の酒は……」

「はい……。勝手なことをして、『めんなさい』

ベルダンディーはますます小さくなるばかりであったが、その時螢一が大きな笑みを浮かべるのを見て、きょとんとした表情を浮かべた。

「とんでもない。おかげで助かつたよ。それに、せっかく飲むんだから、楽しく、おいしく飲めなきやね」

「……はいっ」

ベルダンディーの笑顔に、螢一はそつと彼女の手を取つた。一瞬驚いたような表情を浮かべたベルダンディーだつたが、そのままそ

つと目を閉じた。

ふたりの距離が徐々に縮まり。

「ふうん、なるほど。そういう訳ね」

入り口から聞こえた声に、ふたりがはつと振り向くと、そこにはウルドが「ヤーヤとした笑みを浮かべてふたりを見つめているではないか。

「ウ、ウルドッ！？」「姉さん？」

「ほほほ、なるほどねえ。これなら抵抗されないものねえ。ベルダンディー、あんたもなかなかやるじゃない？」

「姉さんっ？ 別に私はそんな……」

抗議をしかけるベルダンディーに、ウルドはちちちと指ワイヤーをしてみせた。

「ほらほら、私に文句を言つ前に、隣を見て見たら？ 何か、大変なことになつてゐみたいだけ？」

「え？ きやあつ、螢一さんっ！？」

ベルダンディーが見たのは、顔をユテタコ顔負けに赤くして、ついでに鼻の下から赤い筋をひいて倒れ込む螢一の姿だった。

「螢一さんっ、し、しつかりしてくださいっ！」

ベルダンディーが揺すつても、螢一はどこかしらとろけたような表情を浮かべたまま、ぴくりともしない。ベルダンディーが立ち上がつたはずみで、螢一の手が再びなにやら柔らかい所に触れたことに、当のベルダンディーは丸つきり気がついていなかつた。

しばらくその様子を見ていたウルドは、やがてふたりを放り出し、その場を離れた。

まあ、放つておいても螢一に別条はなからうし、何かあればベルダンディーが黙つているまいから心配はない。
しかし……。

「やーれやれ。これだけ舞台がそろつていたのにこの調子じゃ、まだまだ時間がかかりそうねえ。……ねえ、ワインディベル？」「いつもといえばいつも通りの光景を見ながら、ウルドは小さく天

に向かつて苦笑してみせたのであつた。

養老の滝も、酒は釀せど男女の仲は釀せぬよつである。
まあ、このふたりは言わば長期保存酒のよつなもの。ゆつくり見
守るも、また醍醐味である。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2180e/>

養老の滝

2010年10月9日00時05分発行